巻 頭 言

コロナ禍に思う

Chaos with Coronavirus

京都大学心臓血管外科

湊谷 謙司

Kenji Minatoya

心臓血管外科手術における術中の危機管理はきわめて重要である。想定外の事態に対する早急な対応の有無が生死に直結する。異常事態に対して指揮を執るのは、責任者である術者である。チームメンバーである助手、麻酔科医、人工心肺技師、看護師と連携を取りながら、まずは事態の詳細を把握することが第一である。そのために情報を急いでしかし丹念に収拾することから始める。その情報の分析から、さまざまなオプションから最も適切であろうと思われる対応をとる。その際には、つねに冷静であり続けることが必須で、そのうえで総合的な判断を迅速に下す。もちろん、メンバーからの意見を聞き、必要に応じて受け入れることが独善に陥らないために重要である。心臓血管外科医を目指す若手医師は、自身もそうであったが、キャリアの中でどれだけ早く執刀できるかどうか、そして執刀症例数をどれだけ積み重ねていくかが最も気になるし、また執刀の際にはできるだけ速く手術を行うことに気をとられている。しかし、心臓血管外科手術において何よりも重要なことは、結果的に患者さんが元気に退院し、さらには社会復帰を遂げてもとの生活に戻っていくことである。その意味で、私自身が若手医師に目指してほしい目標である心臓血管外科医のあるべき姿とは、緊急事態であっても、チームプレーの中心として全体の士気を上げつつ指揮がとれる執刀医であるし、また、執刀医でなくとも執刀医を助け、チーム全体の総合力を高めることができる外科医である。そして、危機の渦中であればこそ、チームはリーダーに従って行動していかなければその危機を乗り越えることができないであろう。

さて、中国に端を発したコロナウィルスが国内はもちろん国際社会に大きな影を投げかけている。経済活動が冷え込み、大恐慌が引き起こされる可能性も取り沙汰されている。拙稿を書いている現在、政府から緊急事態宣言が出され、よりいっそう緊迫感が高まってきている。大きな衝撃は欧米での指数関数的な死者の増加であり、全世界的な被害の急速な拡大である。欧米の友人からも、毎日のように当地の悲惨な状況の知らせや対応が遅れているように見える日本への警告が届いている。勤務先でもコロナウィルスへの対策が立てられ、通常的心臓血管外科手術への大きな影響が懸念されている。はたして、このウィルスが本邦においても欧米のような多数の死亡例を引き起こすのか、そもそもこのウィルス禍は収束するのか、拙文を執筆しながら状況を憂っている。一外科医である筆者は、もちろんこのウィルスの詳細に関しては門外漢であり、至極当然ではあるが、専門家の指導を仰ぎながら正しい対処を行っていくしかないと考えているし、医師としては、押し寄せつつある第二波に向けて病院の方針にそって粛々と活動していく所存である。

これまでの政府の方針が結果的に正しいかどうかは別として、この緊急事態の対処について世間が

喧しい。マスコミや SNS で思ったままの、ある意味で無責任な意見表明が跋扈している。海外のリーダー達の呼びかけは素晴らしいとする一方、政府の方針のひとつずつに対して斜に構える態度は正しいのであろうか。私は、政府の施策がすべて素晴らしいとは思っておらず、施策への疑問点も少なからず有している。しかし議論に当たっての批判的な態度は無視するべきではないとは言え、施策に対するいちいちの非難は混乱を助長しているように筆者には思える。とりわけ、この手の非難で一杯のワイドショーなどのテレビ番組には絶句するのみである。どうして、コメディアンとタレントが議論する居酒屋の与太話のような討論を長々と放映しなければならないのであろう。似非インテリを持ち上げる風潮も勘弁してほしい。医師免許を持っているだけで有能な医師としての扱いを受けるテレビドクターはどれほどの臨床家であり、そもそも感染症学や公衆衛生に通じているのであろうか。われわれにいちばん必要なのは、正しい情報であり、とりわけ信頼できる専門家の分析と説明である。その意味でマスコミには、専門家会議の議事録やその要約でも入手して報道してもらえればありがたい。事実そのものではなく、角度をつけて報道をする新聞社があり、報道番組がワイドショー化している昨今、マスコミの報道には信頼性がなくなってきた久しい。この国家的危機、世界的危機において、信頼できる情報を得る方法が少なくなっていることが何より大きな問題である。その意味で日本心臓血管外科学会を始めとするわれわれの職能団体がコロナウィルス対策に対するさまざまな提言をいち早く表明したことは大きな意味がある。危機を脱するためには、正確な情報にそってリーダーを中心に同じ方向を向く必要がある。

このコロナ禍がもたらしたことは、大きな混乱だけではない。いわゆる三密を避けるための勤務形態や会議方法の変更である。大学の授業も Web で始められているし、対面を原則としていた診療もオンラインで初診から可能になる見通しである。学会も当面の間は Web が主体となる可能性がある。このインターネットを介した双方向性のコミュニケーションは、すでにある程度は利用されていたとは言え、これまでの阿吽の呼吸で行われていた日本型のコミュニケーションや、毎回数千人を集めて開催されていたわれわれの学会スタイルを大きく変えていくのかもしれない。この強制的な流れはコロナ禍が去ったあとにどうなるのか、そもそもコロナ禍が去るのかどうかも判然としないが、この世界的な厄難は間違いなく近未来のわれわれの社会を大きく変化させていきそうだ。

いずれにせよ、この危機を乗り越えるためには、リーダーシップに寄り添いつつ、個々人でできることを 1 つずつ成し遂げていくしかない。これを戦前の雰囲気似ていると揶揄する向きもあるが、疫病に対する人類の戦いを振り返れば、個人の自由はある程度制限されることはやむを得ないと知るべきである。